



TITLE:

Regeneration of Ethno-biological
Knowledge in Children's Daily Practices:
With Special Focus on Pastoral Maasai in
Southern Kenya(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Xiaojie, Tian

CITATION:

Xiaojie, Tian. Regeneration of Ethno-biological Knowledge in Children's Daily Practices: With Special Focus on Pastoral Maasai in Southern Kenya. 京都大学, 2017, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20497>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2018-03-31に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	田 暁潔
論文題目	Regeneration of Ethno-biological Knowledge in Children's Daily Practices: With Special Focus on Pastoral Maasai in Southern Kenya （子どもの日常実践における民族生物学的知識の生成 ーケニア南部に住む牧畜民マサイの事例からー）		
(論文内容の要旨)			
<p>人びとが生活のなかで蓄積し活用してきた民族生物学的な知識（Ethno-biological Knowledge: EK）が、生物多様性の保全や地域社会の持続的発展のために有効に利用できるという認識は、広く共有されるようになった。その一方で、社会環境や自然環境が大きく変化するなかで、新しい世代はEKを失ってゆくのではないかと懸念も提起されており、EKに関する研究は、現在、アフリカ地域研究の重要な課題のひとつである。本論文は、ケニア共和国南部に住む牧畜民マサイを対象として、子どもたちがどのようにEKを生成しているのかを、定量的・定性的なデータにもとづいて文化人類学と発達心理学の方法に依拠しつつ実証的に明らかにすることを目的としている。</p> <p>本論文の序論である第1章では、民族生物学における理論的な進展と、この分野における子どもの発達にかかわる議論を整理し、EKの獲得を理解するためには、社会的な文脈に配慮しつつ子どもの日常的な実践に注目する必要があることを論じた。</p> <p>第2章では、農業と観光業の進展や市場経済の浸透によって、マサイの生業活動が大きく変化している現状を記述した。マサイは牧畜を主たる生計手段として維持しながらも、出稼ぎなどのさまざまな現金稼得活動に従事している。また、調査地の子どもたちは現在、大多数が学校に通っている一方で、性別と年齢に従って幼い時期から生業活動においても重要な役割を果たしている。</p> <p>第3章では、一つのホームステッドに住む2～11歳の少女4人と少年9人の日常活動を、生業活動と遊び、休憩、移動、その他の五つのカテゴリーに分類して記述した。特に、6歳以上の少年と8歳以上の少女は生業活動にもっとも多くの時間を費やしていること、また、子どもたちは多様な遊びをおこなうが、なかでも「ごっこ遊び」がもっとも頻繁に見られることを示した。</p> <p>第4章では、子どもたちが牧畜活動にどのように参与し、そのなかでEKをいかに習得しているのかを記述した。子どもたちは学齢に達する以前から家畜管理を手伝っているが、学校に通うようになると、少年たちは日常的に搾乳や家畜の健康管理に参加するほか、休日には、日帰り放牧や家畜キャンプにおける放牧にも従事していた。少女たちは主として搾乳や幼獣の世話にたずさわるが、牧畜活動への参与は年齢とともに減少し、家事に従事する時間が増加する。本章では学校に通う子どもたちであっても、家畜管理に参与することをおして牧畜という生業活動に関するEKを確実に習得</p>			

していることを明らかにした。

第5章では、薪の採集に従事することをおして、少女たちがいかにEKを生成しているのかを論じた。調査対象とした6～15歳の12人の少女たちは学校が休みであった55日間のうち、21日にわたって薪採集に参加していた。彼女たちは樹木の太さや乾燥度合いを吟味しながら多様な植物種を利用しており、その過程で豊かな身体的経験を積みつつ知識や技能を習得していた。少女たちはまた、こうした経験のなかで得た知識や情報を、子ども同士あるいは成人とのあいだで交換しあっていた。

第6章では「放牧ごっこ」と「ままごと」という二つの遊びに焦点をあてて、遊びのなかで子どもたちが日常生活における仕事を再現し、さまざまな社会的な役割を演じつつEKを生成していることを論じた。たとえば放牧ごっこのなかで子どもたちは、放牧地や給水地、放牧ルートなどを模擬的につくり、実際の放牧中に遭遇した出来事（家畜が迷子になったことなど）を再現して、自分が過去に得た経験や情報を伝えあっていた。

最後に第7章では本論文の論点を整理し、マサイの子どもたちに見られるEKの生成に関する二つの重要な特徴を論じた。第一に、子どもたちは学校に通っているにもかかわらず、依然として生計維持に関連する日常活動に積極的に関与することをおして、自然環境の認知と利用や家畜管理に関する身体的経験を積み、技能を発達させつつEKを習得・生成している。第二に、生業活動や遊びに参加することをおして、マサイの子どもたちは社会的役割を果たしつつ、社会のほかの成員とのあいだで密接なコミュニケーションを実現している。本章では、こうした活動と対人的な相互行為、その基盤となる社会的・文化的なしくみのなかで、子どもたちがEKを習得・創出していると結論した。

(論文審査の結果の要旨)

世界各地の民族は、自然環境や生業活動に関連する詳細な知識や巧みな技術を歴史のなかで蓄積・活用してきた。それは民族生物学的知識 (Ethno-biological Knowledge: EK) と総称されている。グローバル化の波のなかで人びとの生活が大きく変化し、子どもたちが学校教育を受けるようになった現在、EKがどのように継承され、あるいは変容するのかは地域研究の重要な研究テーマのひとつである。同時にまた、子どもたちはどのようにEKを習得してゆくのか—成人がもつ知識を教えられるだけではなく、身体的な生活経験のなかでみずから創出するのではないか—に関しても、発達心理学や人類学の分野で多くの議論がなされている。

本論文はケニア共和国のマサイ社会を対象として、子どもたちが日常的にいかなる活動をおこない、そのなかでEKがどのように生成されているのかを明らかにすることを目的とする。マサイは、東アフリカを代表する牧畜民のひとつであり、現金経済の浸透や野生動物保全の拡大、学校教育の普及といった社会環境の大きな変化との関連において多くの研究がなされてきた。しかし、子どもを対象としてEKの継承や生成に焦点をあてた研究は少ない。本論文は長期にわたるフィールドワークにもとづいて、地域研究と文化人類学の方法論に依拠しつつこの課題を実証的に解明した研究である。

本論文は、以下の三点において、アフリカ地域研究に重要な貢献をおこなっている。

第一には、子どものEKの習得状況を日常生活全体のなかに位置づけるために、その活動を定量的に分析したことである。具体的には、合計8人の子ども (4~11歳の少女4人、2~6歳の少年4人) を対象として起床時から就寝時まで個体追跡をおこない、5分間隔で行動を記録した。追跡時間の総計は155時間45分である (一人あたり平均約19時間30分)。その結果、少女は遊び (総時間の約32%) と仕事 (約29%)、食事と休息 (約13%) に多くの時間を費やし、少年は遊び (約41%) と仕事 (約21%)、食事と休息 (約18%) を主たる活動としていた。また、家畜の放牧中の活動を調査するために、7~9歳の少年5人を対象として、朝に家畜放牧に出発してから夕方に帰宅するまで個体追跡をおこない、5分間隔で行動を記録した。追跡時間の総計は62時間30分である (一人あたり平均約12時間30分)。その結果、放牧中の少年は家畜管理に多くの時間 (約32%) をあてているが、遊び (約15%) や休息 (約14%)、会話 (約10%)、食事 (約8%) にもかなりの時間を費やしていることを明らかにした。このようにEKが生成する場となる日常的な活動を克明に解明した本論文の功績は大きい。

本論文の第二の貢献は、子どもの発達にともなって日常活動が変化してゆくことを実証的に示すとともに、学校に通っている子どもたちも生業活動に積極的に参与し、そのなかでEKを習得していることを説得的に論じた点である。子どもたちは、3歳頃から子ヤギ・ヒツジの搾乳や群れ管理に参加し始め、成長するにつれて少年たちは成ヤギ・ヒ

ツジ群の放牧や給水、健康状態の点検などに関与するようになる。また、少女たちは薪集めなどの女性が担当する家事の主要な担い手となっている。生業へのこうした参加様式は、マサイ社会における性・年齢による分業体制にもとづいており、このような活動や対人関係のなかで子どもたちが自然環境や家畜に関するEKを生成してゆくことを、本論文が詳細に論じたことは高く評価できる。

本論文の第三の貢献は、子どもたちが仕事や遊びをとおしてEKを習得・創出する過程に関する「厚い」民族誌記述を達成したことである。遊びの事例については、それに誰が参加し、どこでどのように始まり、どんなモノを使っていかに進行するのか、そしてどのように終わるのかに関する克明な記述がなされている。「放牧ごっこ」のなかで子どもたちは、砂のうえに家畜キャンプや放牧ルート、水場などを模擬的につくり、キリンやヤギ・ヒツジの糞あるいは樹木の種を集めて家畜に見立て、それを移動させる。その途中では、家畜が迷子になったり、ライオンなどの野生動物に遭遇したりする事件を発生させ、それに対処する。また、牧童に指示を与える父親や、家畜を野生動物から守る青年といったように、子どもたちは異なる役割を演じつつ遊びに興ずる。本論文が、子どもによるEKの習得・創出という観点からこうした遊びに関する質の高い民族誌を作成したことは大きな学術的貢献である。

以上のように本論文が、定量的・定性的な資料を駆使しつつ子どもによるEKの習得と創出の過程を解明したことは、アフリカ地域研究や牧畜社会研究の分野における重要な貢献である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。